

第1回準備会における主な意見(案)

【議論の前提】

- 会議体で抜けがちな視点は、子供・当事者の声であるため、そうした場を設定する必要がある。単に市の課題を子供たちに押し付けるということがあってはならない。
- 教育の議論においては、10年間の時間軸のギャップを意識し、人口といった客観的なものに加えて、地域の意思が入った議論にしなければならない。学校や教育委員会だけでなく、地域の視点も入れることで、「この地域だからできる」という教育をつくっていく必要がある。
- 会議の外においても委員が主体的になることがこの会議体のアウトプットが実行・実現されるのかの肝となる。

【本市の教育現場の現状】

- 今後社会がどのように変わっていくのかという点に危機感を抱きながら教育活動を行っている。
- 京丹後市の学校における ICT の利活用がまだまだ低い。90%くらいまで高めなければならない。
- 丹後学は一定の成果はあるが、京丹後市をどうしたいのかということまでの学びをできているかは自問している。
- シリコンバレーでイノベティブな活動をしている人々を調査・研究した成果をプログラム化した「Kyotango Sea Labo」のような教育課程外の取組を、公教育の中に入れていくことができればよいのではないか。
- 府の策定した「府立高校の在り方ビジョン」に基づき、これからスクールポリシーを決めていくこととなるが、府と市の擦り合わせを意識していくことが重要である。

【教育の各種課題】

- 学校の設置者ごとにまる抱えでやらないといけない一方で、シームレスのシームの部分ブレイクスルーするようなやり方の発案を期待する。
- 人生に主体性をもってかかわっていく、切り拓いていくというマインドセットをアントレプレナーシップと捉えている。
- 子供たちが地域を出ていくのは高校卒業時であり、それまでに地域のことを学んでもらうことが重要であるため、飯田市では市と高校が協定を結び、地元の方と一緒に地域人の育成のためのカリキュラムを作成した。

- 飯田市においても義務教育と高校教育には壁があったが、学校教育ではなく社会教育の観点からかかわることにより、社会教育を通じて地域と学校を結び付けることで地域人材育成のカリキュラムを作成した。
- 高校が義務教育の取組の流れをしっかりと受け止めていくことが重要である。

【地域と教育の現状】

- 丹後のものづくりは日本を代表するレベルのものが集結しているが、子供の頃はそうした意識が希薄である。こうした技術をどのように次世代に継承していくか、教育から就職までを見通すことが必要である。
- 丹後を離れて初めて地元の良さが分かることもあり、一度離れて刺激を受けて学んだことを持ち帰ってほしい。
- 日頃から子供に丹後の良さを伝えていくことが重要である。

【今後の教育・人材育成の在り方】

(全般)

- 先を見通した教育を行うことが子供の向上心の向上や高い教育効果につながる。
- どのような市を目指すのかという点を言語化することが重要である。
- 京丹後市で育つ子供がどのような学びでどのような知識やスキルを身につけ、そして目指す人材像は何なのか、という点を就学前から高等教育まで一貫したものを教育者と地域が共有することが重要である。
- 教育はあまり余計なことをしないという発想の転換が必要ではないか。地元に戻ってくるかどうかといったことをあまり考えすぎず、どういう世界があるのかということ子供たちに伝えていくことが必要ではないか。
- 学力なのか、地元へ戻ってきてもらうことが課題なのかなど、何が問題なのかという点を明確化する必要がある。

(学びや指導の在り方)

- GIGA スクール構想と学校との関係をどのようにしていくのかを考えていかなければならない。GIGA スクール構想により、先生の学習観、学力観、指導観変えていくことが重要である。
- どのように地域の素材を学校現場に落とし込めるかが重要であり、地方から特色のある教育にしていきたい。

(グローバル人材)

- 京丹後市という視点と世界という視点のどちらかにということとはなかなか難しく、焦点が定まっていない。

- 地元に残って地域を守るのか、世界にはばたくのかということは大きなジレンマだが、もっと広い世界にということも当然起こる。一時期は出ていくのかもしれないが、入ったり出たりの流動性が高まると良い。あわせて、魅力を持った国内外の人が京丹後市内の入ってくるのが重要である。
- グローカル人材育成のためには地域も一体となって取り組んでいく必要がある。
- 丹後の技術は世界に誇れるものでもあり、世界を視野に入れた教育・人材育成を行うことも重要である。

(以上)